

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第8次調査概報

護摩堂村巻遺跡 護摩堂曲戸遺跡

2003年3月

上市町教育委員会

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第8次調査概報
護摩堂村巻遺跡 護摩堂曲戸遺跡

2003年3月

上市町教育委員会



1



2

1.弘法堂 2.護摩堂村巻遺跡

序

上市町では、平成6年に下水道管理用道路敷設に伴う発掘調査で、12世紀末から14世紀までの中世墳丘墓群を調査しました。この遺跡は黒川上山古墓群であり、完全な形で今に残る全国でも稀な遺跡であることが判明しました。町ではその重要性から道路の方線変更を行い、全面的に遺跡を保存し、同年12月には上市町指定史跡として後世に残すことにいたしました。

上市町教育委員会ではこの遺跡を次代に残すため保存整備をする予定ですが、その資料作成のための発掘調査を平成8年度より国庫補助を得て計画的に行っております。

前回までの調査で、黒川上山古墓群からは12世紀後半から15世紀に及ぶ埋葬施設67基が、黒川上山古墓群の東側（黒川塚跡東遺跡）には古墓群よりやや古いと思われる6基の墳丘墓、石垣遺構、平坦面、石列、礎石跡が確認されました。また、伝承真興寺跡からは本堂跡、塔跡、堂跡と思われる基壇、礎石などの他、池跡と思われる窪み、湧水地、盛土、大きな窪みのある平坦面が確認されました。日枝神社裏遺跡、さらに分布調査では、周辺の山林に大小様々な平坦面が確認されました。昨年度に調査を行なった円念寺山遺跡では、全国屈指の大規模経塚群が確認され、また貴重な出土遺物も全国的に注目を集めました。そしてのことから、付近一帯が黒川上山古墓群・黒川塚跡東遺跡・伝承真興寺跡・日枝神社裏遺跡を含めた一大遺跡であったことがさらに明確になったばかりか、鏡岳・立山を中心とする立山信仰にも関連する遺跡群であったという可能性が示されました。

今回の調査は、黒川地区の上流にあたる弘法大師ゆかりの地である護摩堂地区を対象として平成14年7月から平成15年3月にかけて実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るよがとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご指導をいただきました文化庁文化財部記念物課、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山考古学会、護摩堂地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成15年3月

上市町教育委員会

例　　言

1. 本書は富山県中新川郡上市町護摩堂地内に所在する護摩堂村巻遺跡及び護摩堂曲戸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成14年7月16日から平成15年3月31日までの延べ69日間で実施した。分布調査は富山大学人文学部考古学研究室の協力を得て、平成14年6月7日から同9日までの3日間で行った。
3. 調査の対象とした面積は、護摩堂村巻遺跡12,000m²、護摩堂曲戸遺跡2,000m²である。
4. 調査は、国庫補助金、県費補助金を得て上市町教育委員会が実施した。
5. 調査事務局は上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁文化財部記念物課、富山県教育委員会（文化財課・県埋蔵文化財センター）の指導を受けた。事務及び調査は、生涯学習課文化振興係係長 高慶孝・同嘱託 三浦知徳が担当し、生涯学習課長 牧野茂雄が統括した。
6. 遺物の整理、本書の編集・執筆は高慶・三浦が行った。遺物の実測・トレースは調査担当が中心となり、後述する整理作業員が行った。
7. 調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義なご指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意をしたい。
　　国立歴史民俗博物館考古研究部助手 村木二郎、滑川市教育委員会生涯学習課学芸員 野木浩之、立山町教育委員会社会教育課主事 田中幸生、黒川区長 伊藤勝保、護摩堂区長 三浦利信（順不同・敬称略）
8. 調査参加者は次のとおりである。

発掘調査参加者：山口歎志（富山大学大学院生）、岡田　幸、折田晃子、前田直美（富山大学学生）、荒木智恵子、岩城秀子、大沢邦子、大沢徳雄、金子みつゑ、川上　藍、川上富美子、酒井栄子、酒井文子、澤井新三、甚内みき子、高城英子、高城富美子、中川セツ、早崎秋子、松本純一

分布調査参加者：岡田　幸、折田晃子、北川康介、佐藤絵理奈、田中俊輔、丹羽直美、林　昭男、福崎裕介、本田光久、間野　達、宮田志保、吉村　晶（以上富山大学学生）、松澤那々子

整理作業員：小川卓哉、竹谷充生、向嶋　裕、吉村　晶（以上富山大学学生）、甚内みき子

目 次

序

例 言

目 次

I	遺跡の環境	1
II	調査に至る経過	1
III	調査の経過	3
IV	調査結果	5
1.	護摩堂村巻遺跡	5
(1)	遺構	5
(2)	遺物	9
2.	護摩堂曲戸遺跡	10
3.	分布調査	10
V	まとめ	11
引用・参考文献（巻末）		

図

- 第1図 地形と周辺の遺跡
第2図 遺跡周辺図
第3図 護摩堂村巻遺跡遺構全体図
第4図 護摩堂村巻遺跡第1・2トレンチ実測図
第5図 護摩堂村巻遺跡第1トレンチ集石実測図
第6図 護摩堂村巻遺跡第3トレンチ実測図
第7図 護摩堂村巻遺跡第4トレンチ実測図
第8図 護摩堂村巻遺跡第5トレンチ実測図
第9図 護摩堂村巻遺跡第6トレンチ実測図
第10図 護摩堂村巻遺跡第7トレンチ実測図
第11図 護摩堂村巻遺跡第8トレンチ実測図
第12図 護摩堂村巻遺跡出土遺物実測図
第13図 護摩堂曲戸遺跡遺構全体図
第14図 護摩堂曲戸遺跡第1・2・3トレンチ実測図
第15図 護摩堂曲戸遺跡第4トレンチ実測図
第16図 分布調査遺構概略図・採集遺物実測図

写真図版

- 図版1 黒川・護摩堂地区周辺航空写真
図版2 遺構写真（護摩堂村巻遺跡）
図版3 遺構写真（護摩堂村巻遺跡）
図版4 遺構写真（護摩堂村巻遺跡）
図版5 遺構写真（護摩堂村巻遺跡）
図版6 遺構写真（護摩堂村巻遺跡）
図版7 遺構写真（護摩堂村巻遺跡・護摩堂曲戸遺跡）
図版8 遺構写真（護摩堂曲戸遺跡）
図版9 遺構写真（護摩堂曲戸遺跡・分布調査）
図版10 遺物写真
図版11 遺物写真

付図 黒川地区周辺分布調査遺跡分布図

I 遺跡の環境

上市町護摩堂村巻遺跡・護摩堂曲戸遺跡は、富山県中新川郡上市町護摩堂地内に所在する（第1図・第2図・図版1）。上市町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西にのびる町である。西は県都富山市、北は滑川市、南は立山町に接し、東側は標高2,998mの姫岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。遺跡の所在地である護摩堂地区は、これまで7次に渡って調査を行ってきた黒川地区の南を東西に流れる郷川の支流交地川の上流にあり、谷間に抜けた山地中腹に開けた平坦地（黒川より約3km）が集落となっている。付近の標高は約370mで、付近からは富山平野と富山湾・能登半島を一望でき、また尾根上に上がれば東方に姫岳を遥拝することもできる。

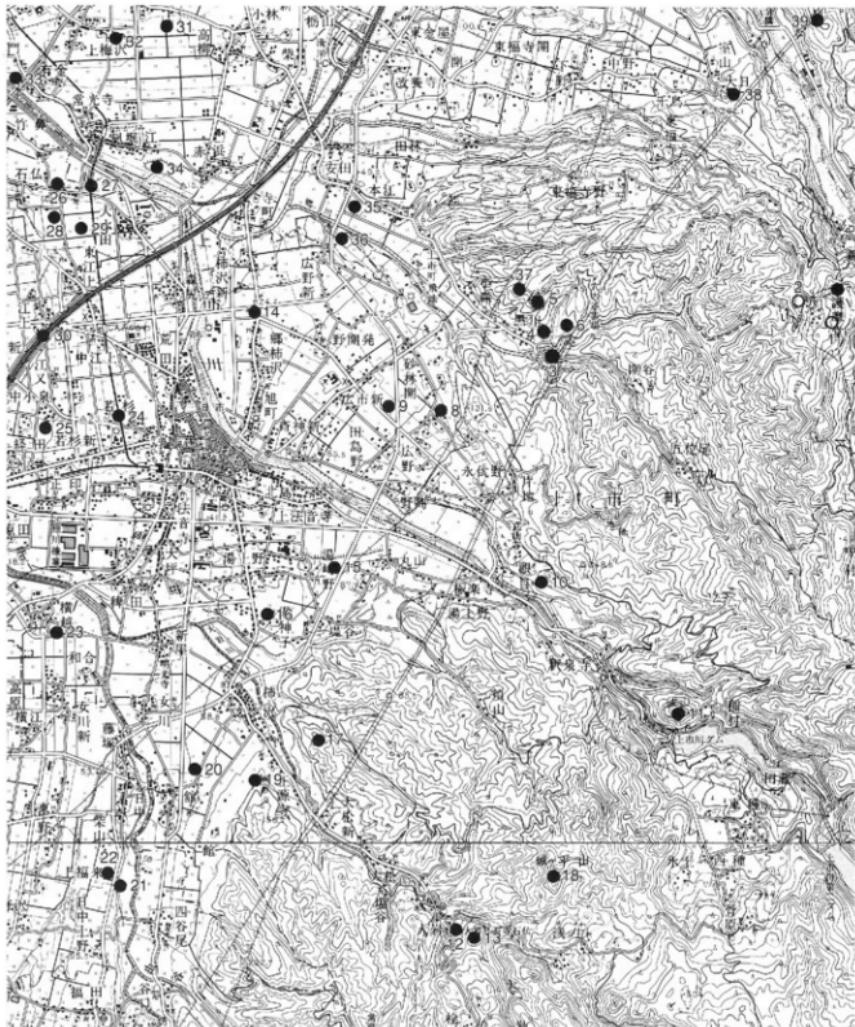
「護摩堂」の名は、弘法大師空海が巡録のおりこの地で護摩を焚いたという伝承によるものである。延暦21年（802）、弘法大師がこの地を訪れた際に住民に水を求めた。しかし付近では水の入手は容易ではなく、老婆が何町も離れた沢を下って水を汲んできた。それを大変憐れんだ弘法大師が鎌杖を地面に突き立てたところ、たちどころに水が溢れ出したという。そして親切にしてくれた住民の幸せを祈って護摩を焚いて祈祷を行ったと伝えられている。なおこの水は「弘法大師の清水」として「富山の名水」にも選定されており、連日水汲み客が訪れて賑わいを見せている。その傍には「弘法堂」あるいは「大師堂」と呼ばれる堂宇が建っている。これは天和年間（1681～84）に真言宗の古刹大岩山日石寺の住僧が弘法大師の靈跡として建立したとされるものであるが、今から80年ほど前に火災で焼失し、現存する弘法堂はその後に再建されたものである。なお、平成10・11年度に発掘調査を行った伝承真興寺跡は、寛和2年（986）に真言宗東密子島流の真興僧都が弘法大師の靈跡をたずねて護摩堂を訪れた際、同地は八峰八谷あってちょうど八葉の蓮華のなかにあるようで、八正道を宣布するのにふさわしいとして一字建立を思い立ったものの、山深く参詣に不便であるということから、その帰路籠の黒川地内花崗山の中腹に庵室を結んだのが開基であったと伝えられている。

このように護摩堂地区には密教系の宗教的伝承が多く残っており、同じく密教的な様相を示す黒川地区の中世宗教遺跡群（経塚・墓・寺院・僧坊等）とも一体のものであった、あるいは密接に関わっていたものと推察される。

町内及び周辺の古代から中世に至る宗教関係遺跡としては、市街地の南東に真言宗大岩山日石寺がある。この寺院は北陸有数の真言寺院で、開基は奈良時代まで遡るといわれ、本尊は薬師佛の不動明王（国指定重要文化財）である。その裏山の京ヶ峰山頂には銅板製經筒及び外容器（珠洲叢）、銅鏡などが出土した大岩京ヶ峰経塚（12世紀後半）がある。また、市街地の東には吉澤洞の眼目山立山寺、南の立山町には日中玉橋経塚、日中東経塚がある。これら中世宗教遺跡のバックボーンをなすのが、文献上古代から中世に登場する堀江保・小森保あるいは堀江莊に関連するとみられる遺跡（江上B遺跡・東江上遺跡・上梅沢町遺跡・本江馬場田遺跡・横越遺跡など）、南北朝期から戦国時代まで中新川一帯に勢力のあった土肥氏をはじめとする豪族の城や居館跡（護摩堂城跡・稻村城跡・郷柿沢館跡・柿沢城跡・茗荷谷山城跡・郷田砦・弓戸城跡・千石山城跡・有金城跡・堀江城跡・堀の内城跡など）であり、これらの遺跡との関わりの中でその消長があったものと考えたい。このことから、平野部の遺跡との関連・山間部の城や寺院との関連も十分視野に入れると共に、密教における山岳信仰のあり方を十分に考慮に入れた調査が必要であり、中新川地区全体の中世遺跡の詳細な検討が必要である。

II 調査に至る経過

上市町黒川地内では、平成5年度に農業集落排水事業の管理用道路が計画され、当該地区に所在する上山古墓群の、



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

1. 護摩堂村巻曲道跡, 2. 護摩堂曲戸遺跡, 3. 円念寺山遺跡, 4. 日枝神社裏遺跡, 5. 伝承真興寺跡, 6. 黒川上山古墓群,
7. 護摩堂城跡, 8. 広野D遺跡, 9. 広野C遺跡, 10. 眼目山旧開山堂遺跡, 11. 稲村山城跡, 12. 日石寺磨崖仏,
13. 大岩京ヶ峰経塚, 14. 郡柄沢館跡, 15. 湯崎野西遺跡, 16. 湯神子B遺跡, 17. 柿沢城跡, 18. 芳荷谷山城跡, 19. 郡田砦,
20. 吾庄城跡, 21. 中玉橋經塚, 22. 日中東經塚, 23. 橫越遺跡, 24. 若杉神田遺跡, 25. 中小泉東遺跡, 26. 石仏遺跡,
27. 石仏鶴町遺跡, 28. 石仏南遺跡, 29. 大水田西遺跡, 30. 江上B遺跡, 31. 上梅沢町跡, 32. 上梅沢遺跡, 33. 金城跡,
34. 堀江城跡, 35. 本江馬場田遺跡, 36. 金助山跡, 37. 小森館跡, 38. 屋の内城跡, 39. 水尾南城跡

事前發掘調査が行われた。調査の結果、本遺跡が全國でも少ないと中世墳丘墓群で、墓数も40基を上回るきわめて良好な遺跡であることが明らかとなった。上市町教育委員会は、上級機関の指導のもと、県文化財保護審議委員渋谷氏（故人）・奈良大学学長（当時）水野正好氏に現地視察をお願いし、保存に関する意見をいただいた。この意見を元に、町当局と再度協議、地元黒川地区からの保存要請もあり、全面保存で合意した。その後同地内は平成6年12月8日町指定史跡として指定され、平成7年度には公有地化も図られた。平成8年度から国庫補助金・県費補助金を得て黒川上山古墓群の保存と一般公開のための資料収集を目的とする周辺調査を行っており、今年度で第8次調査となる。

III 調査の経過

第1次調査(平成6年度本調査) 調査期間：平成6年5月13日から同年7月27日（延べ72日間）。調査対象：1,500m²。遺構：墳丘墓19基など、遺物：珠洲藏骨器、土師質土器（かわらけ）など。年代：遺構と共に伴う藏骨器・土師質土器から13世紀代の墓群で、造営時期もほぼその年代に比定された。その他：調査地区以外の部分においても16基以上の墳丘が視認され、全体で39基以上の墳墓が存在していることが明らかとなった。

平成6年度試掘調査 調査期間：平成6年9月9日から9月22日（延べ11日間）。対象対象：古墓群東側の山林約5,000m²。道路方線の変更に伴う事前の試掘調査。その他：県補助金を受けて実施した。

第2次調査(平成8年度本調査) 調査期間：平成8年11月7日から同年12月17日（延べ25日間）。調査対象：約1,500m²。遺構：墳丘・集石・五輪塔など45カ所の埋葬施設。遺物：珠洲の藏骨器・輸入磁器・土師質皿・五輪塔6カ所。その他：1次調査を含め全体で70カ所の埋葬施設を持つ墓群であることが明らかとなった。

第3次調査(平成9年度本調査) 調査期間：平成9年8月21日から同年10月7日（延べ32日間）。調査対象：古墓群東側平坦面、約5,500m²。遺構：墳丘墓6基、平坦面10、掘立柱建物1、石列1、礎石跡5、石垣遺構1カ所、参道ないし墓道1カ所。遺物：8世紀から12世紀までの須恵器片多数、繩紋土器、硬玉製品など。

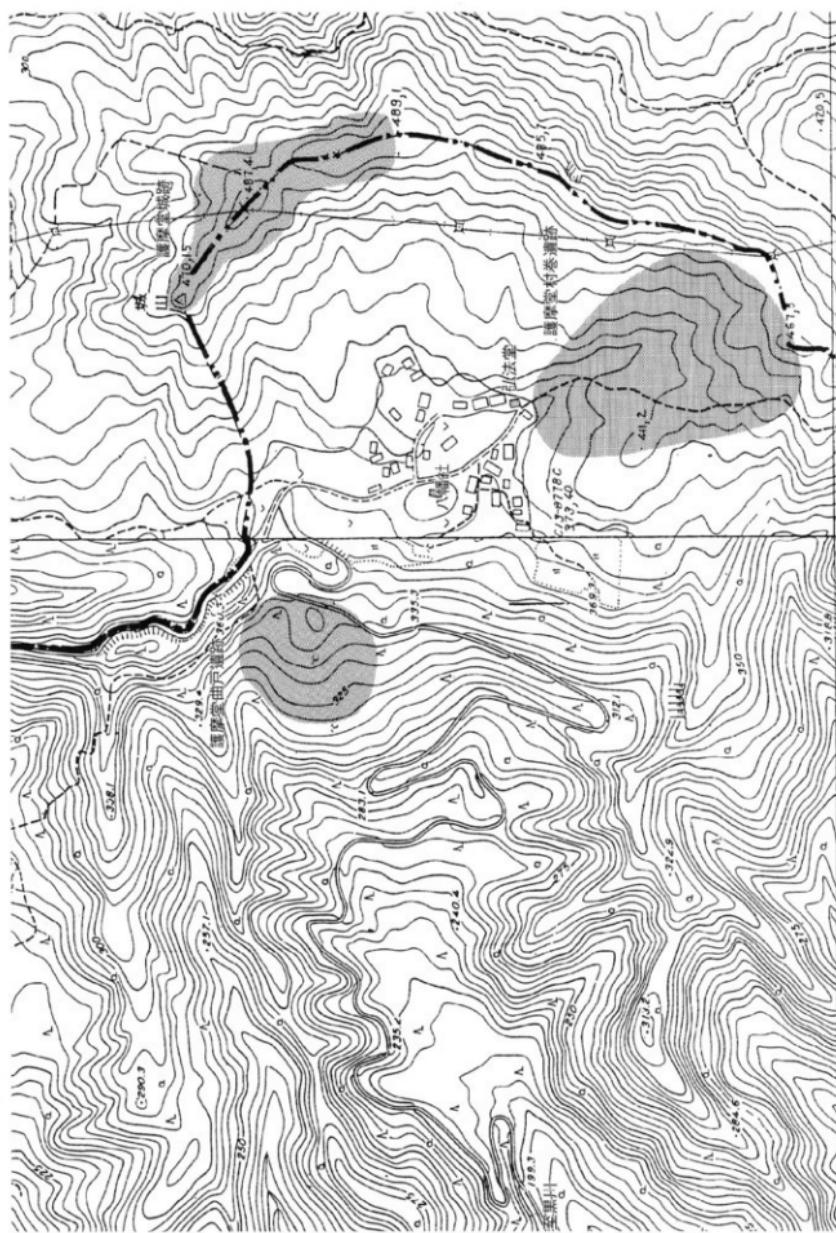
第4次調査(平成10年度本調査) 調査期間：平成10年10月8日から同年12月28日（延べ33日間）。調査対象：旧真興寺跡と伝承のある平坦面約3,200m²。遺構：本堂跡・塔跡・堂跡などの基壇・礎石・盛土状遺構・池・石敷・山門の石段と石垣・湧水地・横穴、など。遺物：土師質皿・須恵器・珠洲・越中瀬戸・唐津など。年代：9世紀から18世紀。その他：黒川地区山中の分布調査を行い、大小様々な平坦面を確認した。

第5次調査(平成11年度本調査) 調査期間：平成11年9月27日から平成12年3月31日（延べ89日間）。調査対象：真興寺跡の再調査、本堂及びその周辺調査。その他：周辺と開谷地区的分布調査及び簡易測量を実施した。

第6次調査(平成12年度本調査) 調査期間：平成12年6月12日から平成13年3月31日（延べ56日間）。調査対象：日枝神社裏の平坦面及び字名、舟ノ谷（円念寺山と呼ばれる）の試掘調査1,500m²。その他：穴の谷壹場周辺の分布調査・簡易測量を実施。

第7次調査(平成13年度本調査) 調査期間：平成13年7月16日から平成14年3月31日（延べ60日間）。調査対象：黒川字舟ノ谷約1,100m²。遺構：石櫛1、集石1、經塚23カ所、塚：14カ所。遺物：珠洲（經筒外容器）、青白磁、独結杵・簪・短刀など金属製品。その他：護摩堂周辺地区分布調査及び簡易測量実施。

第8次調査(平成14年度本調査) 調査期間：平成14年7月4日から平成15年3月31日（延べ69日間）。調査対象：護摩堂字村巻及び曲戸の試掘調査約14,000m²。遺構：平坦面、土壘、石壘状集石・集石・通路跡等。遺物：珠洲・越中瀬戸・唐津・伊万里。その他：片地谷周辺地区分布調査実施。



第2図 遺跡周辺図(1/5,000)

なお、平成14年11月8日、今後の調査や保存・活用の方針を探るため「黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会」を発足し、同日に第1回委員会、平成15年3月19日に第2回委員会を開催した。組織は以下の通りである。

黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会

委 員 長	小島俊彰（金沢美術工芸大学教授・富山考古学会会長、考古）
副委員長	久保尚文（富山大学講師、歴史・文献）
委 員	宇野隆夫（国際日本文化研究センター教授、考古）
	岸本雅敏（富山県埋蔵文化財センター所長、考古）
	久保智康（京都国立博物館学芸部工芸室長、考古・美術）
	西井龍儀（富山考古学会副会長、考古）
	福江 充（富山県立山博物館学芸員、歴史）
	山岸常人（京都大学大学院工学研究科教授、建築）
アドバイザー	伊藤清江（富山県教育委員会文化財課課長、行政）
	坂井秀弥（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官、行政）
顧 問	水野正好（奈良大学文学部教授、考古）
事 務 局	上市町教育委員会生涯学習課

IV 調査結果

1. 護摩堂村巻遺跡

(1) 造 構 (第3図～第11図、図版2～図版7)

護摩堂村巻遺跡は、平成13年度の分布調査で確認した平坦面20にあたる。弘法堂裏手の山腹から尾根上にかけての広い範囲にわたって人為的に造り出された大小さまざまな平坦面が連続的に存在しており、その範囲はおよそ20,000m²、標高は370～480mに及ぶものと推定される。一帯は杉の植林が行われているが、雜木・下草の繁茂や倒木などが著しく、今回も本遺跡の全体像を確認・把握することはできなかった。なお、地権者の方々の話によると、この地は植林以前には焼畑及び炭焼きに利用されていたとのことである。

今回の調査では、国上座標X79422～X79618、Y23843～Y23972の範囲において面積約12,000m²、標高約400～440mに及ぶ7群33箇所の平坦面（以下では「平〇～〇」と表記）、土壌状の高まり、通路跡、石列、夥しい数の集石を確認した。そのうちこれらの中核となると考えた平1～1を中心とし、全体で8箇所の試掘トレンチ（計213m²）を設定して造構・遺物の検出を試みた。以下では各平坦面群ごとにその状況とトレンチ調査の結果を概説する。

平坦面群1

平坦面群1は、X79525～X79576、Y23905～Y23955に位置する5箇の平坦面からなり、最高位は平1～4で417m前後、最低位は平1～1で412mを測る。本遺跡の中核部分と考えられる部分で、三方を急峻な斜面、残る一方を土壌状の高まりによって閉まれた擂鉢状の地形を呈している。最も広い平1～1を中心としてその東側に平1～2、平1～3、平1～4、西側の土壌上に平1～5があり、いずれも平1～1よりも高位となる。

平1～1は最大で50m×25mほどを測る不整形の平坦面であるが、本来は単一の平坦面ではなく、いくつかの面で構成されていたようである。しかし現状ではそれぞれの境界が不明瞭であるため、ここでは一括して取り扱った。南北方向でみると、南半部分は標高413m前後ではほぼ水平であるが、中央付近から北に向けて緩やかに標高が高くなっ

てゆき、その比高差は平1-1の南端と北端では約2mほどになる。また東西方向では、南半部分に東から西へと低くなる2段ほどの段が見られるものの、不明瞭である。比高差は東西端で1mほどである。この平坦面上には、5~20cmほどの小型の礫が幅1~2mの範囲に集められたもの、20~30cm大の礫が数点集められたもの、50cmを超える大型の礫が単体で存在するものなどが各所に認められる。しかし現状では配置に規格性は見られず、礫石建物の礫石や根石が後世の畑作の際に寄せ集められたものである可能性がある。これらの石材は施山・岩盤に由来する角礫が大部分であるが、稀に円礫も認められる。

平1-1では第1~第3トレントの3箇所の試掘トレントを設定し、遺構・遺物の検出を試みた。第1トレントは平1-1の南半中央に10m×10mの正方形に設定したもので、その西辺を幅1mで北方に21m延長したものが第2トレントである(第4図)。第3トレントは第1トレント北東で不明瞭ながらも確認できた段差に対して設定したトレントである(第5図)。これらのトレントでは5~10cmほどの表土を除去するとにぶい黄褐色土(2層)が現れる。この土層は第1トレント南隅の深掘区では約90cm、第2トレントでは30~60cmの厚みをもって地山に乗るが、この上面では柱穴等の遺構は検出されず、また分層することもできなかった。前述したように、この場所は三方を急峻な斜面、残る一方を土壌によって囲まれているため、雨天時には大量の水が集まり、巨大な水溜りと化す。雨天の調査時にも土砂の移動の激しさを確認しており、おそらくこうした影響によって本来はこの層中にあった遺構面が長年にわたって搅乱を受けたものと考えられる。なお、この平坦面1-1では地表面~2層中にわたって若干の遺物が出土している(第12図)。中世の珠洲や石器(旧石器~縄文か)が地表面から採集された一方で近世の伊万里が2層中(地表下60cm)から出土するなど、ここでも層序の搅乱を窺わせる。

第1トレントでは、2層中から立ち上がる石壠状及び円形の集石を確認した。いずれも5~20cm人の小振りな礫で構成されている。石壠状集石は、標高412m付近で広がる集石から長さ約5.5m、幅約1.5mにわたって立ち上がり、高さは約50cmを測る。現地表面及び2層上面ではこの石壠状集石を挟んで東西で約30cmの段差があり、この石壠状集石が基壇前面の土留め、そして低位(西側)に広がる集石が基壇前部の石敷きあるいは地固めのような役割をしていたものと考えられる。円形の集石(第5図)は径約1.5mほどの不整円形で、石壠状集石同様標高412m付近から立ち上がっており、高さは約60cmである。鎮壇施設の可能性を考慮して断ち割ってみたが、内部からは何も検出されなかった。これらの集石は基底面が概ね揃っており、いずれも平坦面造成時の土木工事に関わる施設であったものであろう。なお、第2トレントにおいても基底面を2層中にもつ集石が確認できた。幅1.2mの帯状を呈し、トレントにはほぼ直交してさらに外側へと続くようである。第1トレントの石壠状集石との関連が想定できる。基底面は約413mで、高さは約20cmを測る。

第3トレントでは2層上面の精査にとどめたが、地表面において観察された段の上段が2層上面では標高413.5mではほぼ水平であること、トレント北端の集石が第1・2トレントの例と同様に2層中から立ち上がっていることを確認した。

平1-1の西端付近からスロープ状の緩斜面を介して平1-2があり、またここを経て平1-3・平1-4へと至る。平1-2は北方へやや傾斜しており、平1-1と平1-3・4とをつなぐ通路のような役割であったものと考えられる。なお、平1-3・平1-4は全体に平1-1側へ傾斜しており、背後の崖面からの流土に覆われているようである。比高差は平1-1と平1-2が約2m、平1-1と平1-3が約3m、平1-3と平1-4が約1mを測る。平1-1と平1-2の崖面には斜面に張り付くような集石、平1-1と平1-3との崖面には盛り上がって塚状を呈する集石、平1-4背後の崖面にも大きな集石が見られる。時折巨礫や大型の礫が混じる以外は、他の集石同様小型の礫によって構成されている。このうち平1-1と平1-3との崖面に第4トレントを設定した。表土下に褐色の流土があり、それをトレント北端のサブトレントで取り除いたところ、地山を削り出して形成した段を検出した。上の

面は平1-3で、平1-1方向に緩やかに傾斜する。そこから約80cmの落差を経て平1-1へと至るが、これも平1-1中央へ向けて傾斜している。

平坦面1-1の西側及び後述する通路跡に沿うように、全長約74mにわたる土壘状の高まり（以下土壘）が存在する。平1-1側にある土壘北半は上面が標高は約415m前後ではほぼ平坦となり、その幅は4~7mを測る。平1-1との比高差は約2mである。なお土壘の南半では一段高さを増し、標高は約417.5mでまた平坦となる。土壘北端は弘法堂から本遺跡へ至る小道で途切れ、あたかも平1-1への入口のような様相を呈する。この北端付近には1基の炭焼窯跡があり、周囲には炭片と焼けた礫が散らばる。土壘の肩部には径2mほどの巨礫が所々でせり出しており、また斜面部には部分的に集石が認められる。この土壘上面の平坦部南端付近から派生するように、一段低く平1-5が造り出されている。標高は約414.5mを測る。この土壘と平1-1との斜面部に第5トレンチ、平1-5と平1-1との斜面部に第6トレンチを設定した。これらのトレンチでは、いずれも地山を削り出した平坦な上面と、斜面部に広がる集石を確認した。第5トレンチでは当初より集石の一部が顔を覗かせていたが、第6トレンチの集石はトレーニング北辺の大型の礫以外は表土・流土を除去した段階で検出したものである。この土壘の斜面には現状で集石の見られない部分においても葺石状に集石が施されている可能性がある。なお、第6トレンチ下段（平1-1）では、第1トレンチの2層と同一の層中（ここでは3層）において集石を確認した。これは第1トレンチの石壘状集石西側に広がる石敷き・地固め様の集石の延長であろう。

平坦面群2

平坦面群1の南側斜面の中腹、X79483~X79519、Y23889~Y23954の範囲に造り出された平坦面群である。平1-1との比高差は平2-1で約10mを測り、その間は急峻な斜面となる。平2-1・平2-3は斜面から突き出た状態となり、その他のものはその間、あるいは下方に削り出されている。平2-1は標高約422mで舌状に突き出しており、上面は平坦で石敷き状の集石が見られる。その集石は北東側のコーナー部分に顕著で、そこから斜面にかけて稜線を形成するようになっている。また、西側の崖際には長径3.5mの巨岩が露出しており、その周囲にも10~20cm大の礫が集められている。背後の斜面には2基の炭焼窯跡がある。同じく斜面から突き出した平2-3では、平坦面から平1-1側の斜面にかけて5つほどの集石が連なる。標高は約423mを測る。平2-2は平2-1と平2-3との間の谷部に位置し、標高は約420.5mである。平坦面の奥まった位置に長径4mほどの塊状の集石がある。平2-4は平2-3の下方北東側に位置し、標高約420mで平2-2とは同じレベルである。斜面に沿うかたちで円状を呈するが、背後の斜面からの流土によるものか全体的に平1-1側へ傾斜している。北側のコーナー部分にはその後線を意識したような集石が見られる。平2-5は平2-4と平1-4との中間斜面に位置し、標高は約419mを測る。ここも流土に覆われているためか全体的に不明瞭である。平2-6は平2-1西側斜面下方に造り出されたテラス状の平坦面である。しかし流土によるものか全体的に不明瞭で、標高は416.5~418mと幅がある。

ここではトレンチ調査は行なっていないが、平2-6の表土層中から珠洲鉢片（第12図2）を採取した。

平坦面群3

平坦面群3は平坦面群1とは上部を挟んで西側で一段下に位置し、X79482~X79599、Y23848~Y23924の範囲に広がる。最も広い平3-1は小道によって2箇所で分断されており、また不明瞭な複数の段地形が観察できるが、雜木の繁茂が著しく、詳細については今回は確認できなかった。約413m台で推移する標高やその連続性などから、本来は一連の平坦面であったものと判断し、ここでは平3-1として一括して取り扱った。小道沿いには炭焼窯跡がある。南端では幅を狭めて土壘状を呈しその先端には集石が見られるが、集石中には近世~現代に至る陶器片が混じり、後世の土地利用の際に寄せ集められたものようである。平3-2は土壘状を呈し、上面北端部には塹状の盛り上がりがある。頂部の標高は411mを測り、西側のテラス状の平3-3との比高差は約2m、土壘の立ち上がり面と

なる平3-4との比高差は2.5mほどとなる。平3-4には所々に集石や50cm大の礫が見られるが、今回は詳細を確認することはできなかった。平3-5は平1-1西側の土壠と平3-4との間の斜面上に築かれた壇状の平坦面である。標高は約410.5mを測り、土壠上面との比高差は約5m、平3-4との比高差は約2mとなる。平3-6は平3-1南端の土壠状部分の東側の平坦面で、その南側斜面部には長径3~4mほどの塚状の集石が5箇所確認できる。標高は約412.5mを測る。この平3-6の東側に一段低く平3-7がある。西側は弘法堂より続くコンクリート敷きの林道によって切られるが、林道西側は崖となる。標高は平3-7で410.5m、林道では約410mである。

この平坦面群3ではトレーンチ調査は行なっていないが、平3-1南端集石中より唐津の皿（第12図15）、平3-3の北端付近で不明陶器片（第12図21）、平3-6の南側斜面で伊万里の皿（第12図17）を採取した。

平坦面群4

平坦面群4は、X79562~X79618、Y23905~Y23954の範囲で、平坦面群1及び3の北側に弘法堂から的小道を挟んで細長く並ぶ平坦面を総称した。背後は急峻に切り立った山肌で、流上によって本米の地形が大きく損なわれている。標高は最も高所の平4-1で約417m、最も低い平4-5で約407mを測り、比高差は約10mとなる。

平坦面群5

X79422~X79480、Y23843~Y23881の範囲において、平坦面3-6の南に急峻な斜面を介して広がる平坦面群である。平3-1を分断した小道が斜面に取り付いており、それに沿って平坦面が存在する。小道の東側に位置する平5-1は壇状の地形を伴う複数の平坦面からなるが、雑木の繁茂が著しく、詳細を確認することはできなかった。標高は北側の広い平坦面で約419.5mを測り、眼下の平3-6との比高差は約7mとなる。この平5-1と小道を挟んだ位置には、山肌を細長く削り出した犬走り状の平5-2がある。標高は約420~423mで、全体に北側に傾斜しているが、南側では概ね水平となる。小道を登ると右手に小道から派生した細長い平5-3へと至る。平5-3の南端付近には集石があり、その先は崖となる。標高は約423.5mを測る。平5-4・平5-5は小道の左側でより高所に位置し、標高は平5-4で約425m、平5-5で約426.5mを測る。平5-5には径2~5mの塚状の集石が5箇所認められる。

平坦面群6

X79441~X79472、Y23891~Y23919に位置する2つの平坦面で、今回調査地の最高所となる。平6-1上からは木々の干渉がなければ今回の調査地の全てを見渡すことができる。平6-1は北側に幅2mほどのテラス状の張り出しがある。標高は約435mを測り、眼下に見える平1-1との比高差は約22mとなる。その背後の斜面には平6-2があり、さらに上方には炭焼窓跡が残る。標高は平6-2で437.5m、炭焼窓跡前面のテラス部で約439mを測る。なお、平坦面群6の背後の斜面から尾根上にかけてもいくつかの平坦面や土壠状の地形が存在することを確認しているが、今回は図化の対象とすることはできなかった。この内土壠状の地形とそれに伴う細長い平坦面は、地権者の方の話によると、「武士が馬の練習をした所」としての伝承があったという。この尾根の北端に位置する護摩堂城跡との関連が窺われる。

平坦面群7

X79479~X79542、Y23940~Y23972の範囲で、平坦面群1の北を通る小道を上り詰めた場所に位置する平坦面群である。いずれも山肌に沿うように形成された細長い平坦面である。同じく山肌に沿って形成された平坦面群4同様流上による影響が大きく、不明な点が多い。標高は平7-1で約430m、平7-2で約426.5m、平7-3で約422.5mを測る。所々に集石が認められる。

通路跡

前述した土壠の南半と平2-1・平2-6との間に、長さ約36m、幅4~5mの細長い凹地形を確認した。北端・南端ともに比較的急激な落差をもって平1-1及び平3-6に接続するが、その間は比較的緩やかな傾斜となること

から、平1-1から平3-6へと至る通路の跡であったものと理解した。標高は約414~416.5mで北側に緩やかに傾斜している。東側の上界上面との比高差は2m前後となる。また、この通路跡の東辺、つまり土塁の裾部に沿うように、一部途切れはするものの石列状に連なる集石を確認した。この通路跡及び右列の状況を確認する目的で、第7トレンチ（第10図）・第8トレンチ（第11図）を設定したところ、いずれも表土下の褐色の土層を除去することで地山面が現れた。この地山面上、及び流土層中からは多くの小礫が検出されており、この通路跡は地山を削り出した後に小礫を敷いた砂利敷きのようなものであった可能性が高い。また、石列状の集石の中には地山面に食い込む大型の石材も多く存在することから、当初は縦石状の石列を伴う砂利敷きの通路であったものと考えた。後世の土地利用の際にこれらの礫が取り扱われてそれが寄せ集められた結果、現在の石列状の集石が形成されたものであろう。ただし出土遺物はなく、通路跡が形成された時期及び変更を受けた時期は不明である。

（2）遺物（第12図・図版10・図版11）

護摩堂村巻遺跡では中世の珠洲、近世の越中瀬戸、唐津、伊万里などが出土した。擦削した面積の割には点数が少ない。ここではその種類別に概観する。

珠洲（第12図、図版10） 壺あるいは壺の体部片1点（1）、鉢の口縁部片1点（2）の計2点が出土した。前者は外面に9条／3cmの平行叩き目、内面に円形の当て具痕を残す。後者は口縁外端は丸みを帯び、内端は角をもつ。内面には使用痕とみられる摩滅が観察できる。吉岡康暢氏（1994）の珠洲編年Ⅱ期～Ⅳ期（13世紀代）のものと考えた。

越中瀬戸（第12図、図版10） 瓢（3～5、①～③）・皿（6～10）・壺（11、④～⑧）が出土した。瓢はいずれも丸窓で、体部内外面に黒色～黒褐色の鉄釉を施す。5は底部で、断面逆台形の削り出し高台となる。皿は内堀皿で、見込みに印花を施すものは見られない。口縁は端反りとなるもの（7）がある。底部はいずれも断面逆三角形の削り出し高台である。6・9・10は灰釉、7・8は鉄釉を施し、1個体内における灰釉・鉄釉の掛け分けは認められない。6は内面に釉止めの段を持つ。壺は内外面に銷釉を施す小型のものである。

これらはその特徴からいずれも登窯期（17・18世紀）以降のものと考えた。

肥前系陶磁器（第12図、図版10・11） ここでは便宜的に陶胎のものを唐津、磁胎のものを伊万里として区別した。唐津には碗（12・13）・皿（14・15）・壺（18）がある。12はいわゆる刷毛目唐津であるが、胎土は色調が薄く、白色の化粧土が明瞭ではない。13は体部内面と外面上部は灰釉、体部下部と高台内外面には鋸釉が施され、疊付付近は無釉となる。14・15は内面と口縁端部付近に銅錆釉、外面に灰釉を施し見込みは蛇の目釉剥ぎを行なう皿である。佐賀県嬉野町の内野山窯系のもので、大橋康二氏（1993）による肥前陶磁編年Ⅳ期（1690～1780）に属するものであろう。18の壺はほぼ水平に引出した後に下方へ屈曲する縁帶状の口縁を有する壺で、肩部には縱位の刻みが廻る。全体的に薄造りで、暗緑色を呈する灰釉が外面底部付近を除く全面に施される。底部内面には3箇所に胎土目積みの痕跡を残し、うち2箇所では胎土目が遺存する。胎土目の表面には粗粒の圧痕が認められる。大橋編年Ⅰ期（1580～1600）の製品と考えた。

伊万里は皿の底部が2点出土している。16は水色の青磁釉が掛かり見込みは蛇の目釉剥ぎが施されるもので、高台には砂が熔着している。大橋編年Ⅲ～Ⅳ期前半（17世紀後半～18世紀前半）のものと考えた。17は透明釉でこれも蛇の目釉剥ぎが施されている。大橋編年Ⅳ期後半（18世紀後半）のものか。

その他（第12図、図版10） 19は白磁の壺の底部である。胎土は灰色を呈し、緻密である。内面には模様目が明瞭に残る。20は磁器製の仏壇器で、型作りではなく模様成形のものである。杯部外面には透明釉の上から絵付けが施される。21は無釉の陶器で、内外面に顕著な模様目を残す。内面には模様と金属漆様の付着物が認められる。図版10の4は旧石器時代～縄文時代の石器で、頁岩質の石材を用いた継長剖片の一部に微細な剥離痕が残るものである。

その他図版10の⑨～⑪・⑫の施釉陶器、⑬～⑯の磁器、⑰・⑱の無釉の陶器が出土しているが、いずれも詳細については不明である。

2. 護摩堂曲戸遺跡（第13図～第15図、図版7～図版9）

護摩堂曲戸遺跡は、平成13年度の分布調査で確認した平坦面19にあたる。護摩堂集落から黒川地区へ至る旧道沿いに位置し、標高は約320～350mにわたる。最高所に20m×10mほどの方形の平坦面があり、そこから下方に向かって大小様々な平坦面が展開する。平坦面の中には、木々の間を通して日本海まで望むことができるものもある。現状では竹林となっている。

今回の調査はこれらの平坦面群のうち最高所の平坦面（以下上部平坦面）及びそれを取り巻くテラス状の平坦面を対象として行なった。しかし今回は予想外の積雪に見舞われて現場への侵入が困難となり、作業の中断を余儀なくされたため、本遺跡の性格・全体像を把握するには至らなかった。以下では今回の調査で知り得た知見の概略を述べるにとどめ、詳細については次年度以降の調査を待つことにしたい。

今回の調査では、国土地理院X79860～X79914、Y23616～Y23660の範囲（約2,000m²）において地形測量を実施した（第13図）。その結果、ほぼ20×20mの上部平坦面とその周囲のテラス状の平坦面が、あたかも段築を伴う塚状の地形をなしていることが窺われた。その上部平坦面に第1～第3トレント（第14図）、上部平坦面の肩部に第4トレント（第15図）を設定し、この地形の成因及び性格の把握を試みた。層序は各トレント共通で、表土下には竹根による擾乱の著しい土層（2層）が堆積し、その下には地山・岩盤の入り混じった層が横たわっている。なお、第14・15図中の等高線は実線が25cmおき、破線が5cmおきで示してあるが、第2トレントのみは等高線ではなく岩盤の凹凸の表現となっている。

第1・第3トレントでは、その地山／岩盤面が概ね平坦に削り出されていることが判明した。しかし、建物跡などの地上施設や、墓壙・埋納壙などの地下施設の存在はいずれも明らかにし得なかった。また上部平坦面のほぼ中央に位置する第2トレントでは岩盤を径80cm、高さ20cmほどに削り残している様子が確認できた。何らかの表示であった可能性を窺わせるが、詳細は不明である。

第4トレントでは現況の明確な肩部をもつ地形が地山の削り出しによるものではないことがわかり、現在は擾乱を受けている2層中にかつて盛土層が存在した可能性が想定できた。また、斜面部には不明瞭ながらも地山を削り出した段が認められた。ここにも盛土を用いたテラス状の面が構築されていたものであろう。

なお、上部平坦面の南に位置するテラス斜面において、石垣（第13図網点部分）を検出した。地表面にはごくわずかの石材が頭を出している状態であったが、表土及び流土層を除去したところ、高さ1mほどで4～5段の石積みがなされたものであることがわかった。しかし、前述した事由により今回は図示することはできなかった。

なお、今回の調査では遺物は出土しなかったため、時期の特定はできなかった。

3. 分布調査（第16図、付図、図版9）

今回の調査の一環として行った分布調査は、開谷地区から片地區に至る山中を対象に行った。調査は、富山大学人文学部考古学研究室の全面的な協力の下、調査担当者及び学生が行なった。

今回の調査対象地区内では、宗教施設の可能性の高い平坦面群や遺構はほとんど見出すことができなかつた。後世の耕作や植林などによってIH地形が損なわれていることを考慮しても、これまでに実施してきた分布調査の成果と比較すると粗密の差が明らかである。黒川地区を中心とする宗教空間の西限および南限を示すものとして理解することが可能であろう。

なお、黒川地区の中世宗教遺跡群との直接的な関わりはないが、今回の調査で得られた知見を紹介したい。

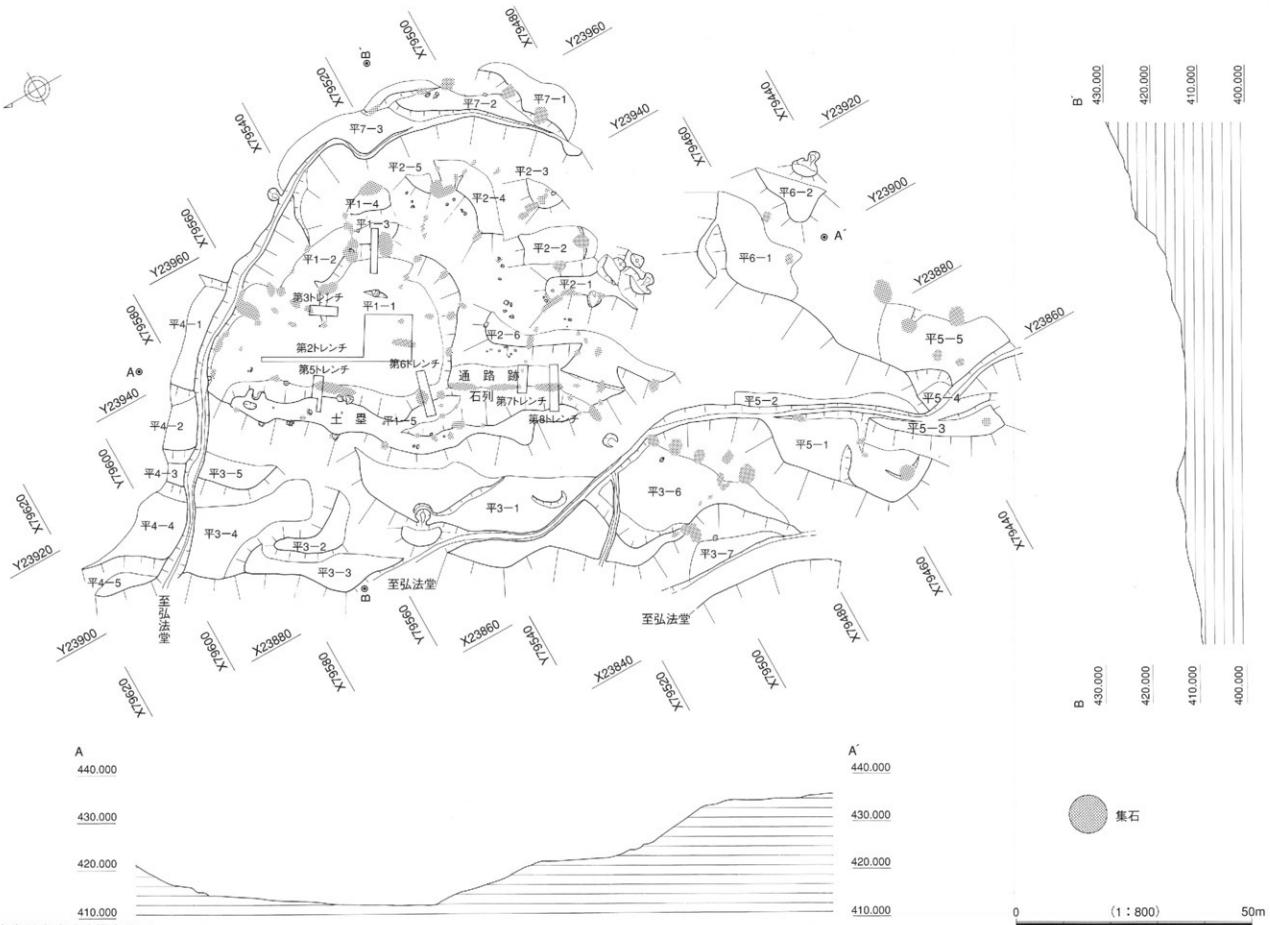
片地池の下流に位置する片地谷の右岸には、現在は移転した旧片地集落の跡地が広がっている。ここでは集落とは小さな谷を挟んだ位置にある宮跡と考えられる平坦面と、集落内に築かれた塚跡を確認した（第16図）。宮跡は、約20×10mほどの平坦面が参道を登りつめた山腹に造り出されているものである（第16図上）。参道からの登り口には鳥居の礎石及び踏み石であったものと考えられる石材が置かれている。その奥に6×5mほどの基壇状の高まり、またその背後には約4m四方の塚状の高まりが認められ、頂部には立石が残る。この塚と同様のものを旧片地集落の内部においても見出すことができた（第16図下）。いずれも性格は不明であるが、おそらく墓であったものと考えられる。

なお、片地谷の河床において越中瀬戸の碗（第16図1）を探取した。黒色の鉄釉が内外面にかかり、底部は削り出し輪高台となる。登窯期（17・18世紀）以降のものと考えた。

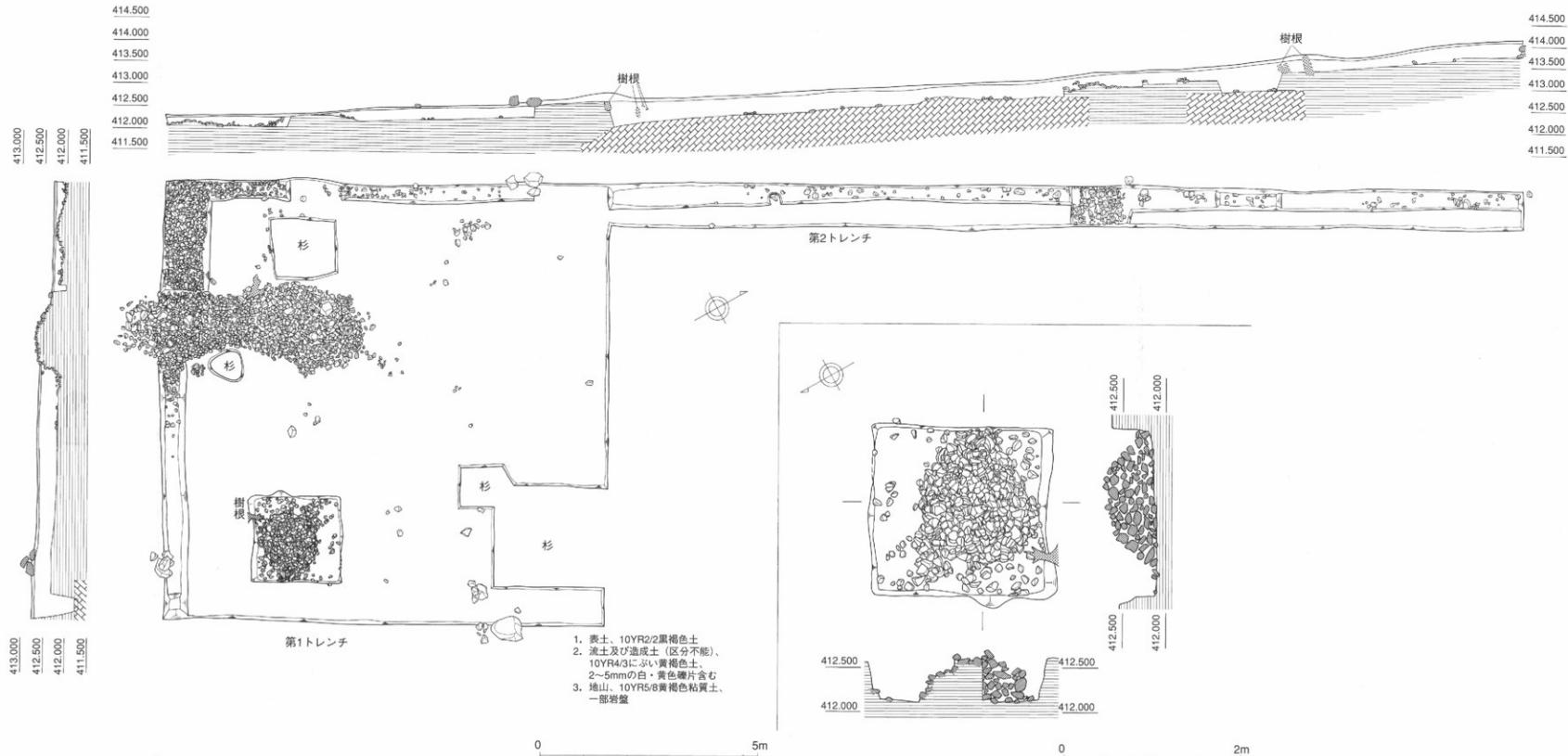
V まとめ

前述の調査結果とそこから得られた見解を整理し、まとめに代えたい。

1. 護摩堂村巻遺跡は、上市町護摩堂字村巻地内に所在する。弘法堂裏手の山腹から尾根上にかけて立地する今回の調査では、国土座標X79422～X79618、Y23843～Y23972の範囲において面積約12,000m²、標高約400～440mに及ぶ7群33箇所の平坦面、土壘、通路跡、石列、夥しい数の集石を確認した。
2. 今回の調査では建物跡など具体的な痕跡の検出はできなかったが、平1-1において検出した石壘状集石や地下集石などから、平坦面造成工事の一端を窺い知ることができた。また、他のトレンチ調査から、土壘の斜面に葺石状の集石が施されていた可能性や、通路跡が当初は地山を削り出して小堀を敷いた砂利敷きのもので、縁石状の石列を伴うものであった可能性がある。
3. 出土遺物は、中世の珠洲、近世の越中瀬戸・唐津・伊万里などがある。点数が少なく積極的な根拠には欠けるが、本遺跡が形成されて何らかの営みが始まったのは、中世にまで遡るものと考えた。
4. 護摩堂曲戸遺跡は、上市町護摩堂字曲戸地内に所在する。護摩堂集落から黒川地区へ至る旧道沿いに位置し、標高は約320～350mにわたる。今回の調査では、国土座標X79860～X79914、Y23616～Y23660の範囲（約2,000m²）において地形測量を実施し、その結果、ほぼ20×20mの上部平坦面とその周囲のテラス状の平坦面が、あたかも段築を伴う塚状の地形をなしていることが窺われた。
5. トレンチ調査の結果、この地形は概ね地山／岩盤の削り出しによって造り出され、そこに盛土を行なうことで最終的な成形がなされたことが窺われた。また、南側のテラス部において石垣を検出した。しかし、上部平坦面では地上施設・地下施設の存在はいずれも明らかにし得ず、また出土遺物もなかたため、本遺跡の性格の解明は次年度以降に持ち越すこととなった。
6. 開谷地区から片地地区に至る山中を対象に行った分布調査では、宗教施設の可能性の高い平坦面群や遺構はほとんど見出すことができなかった。これまでに実施してきた分布調査の成果と比較すると粗密の差が明らかで、黒川地区を中心とする宗教空間の西限および南限を示すものとして理解することが可能であろう。

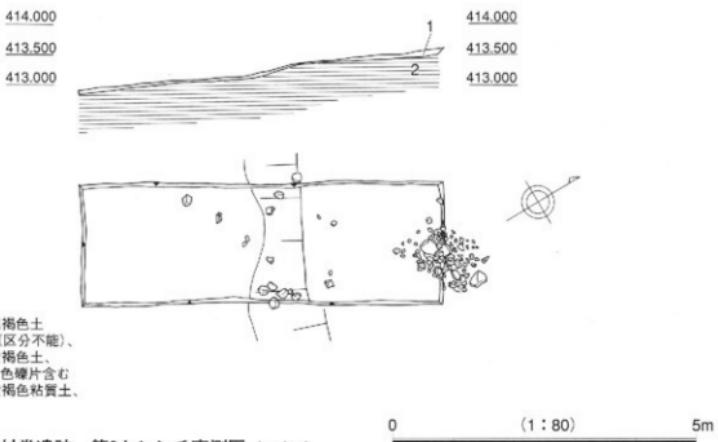


第3図 護摩堂村巻遺跡遺構全体図 (1/800)

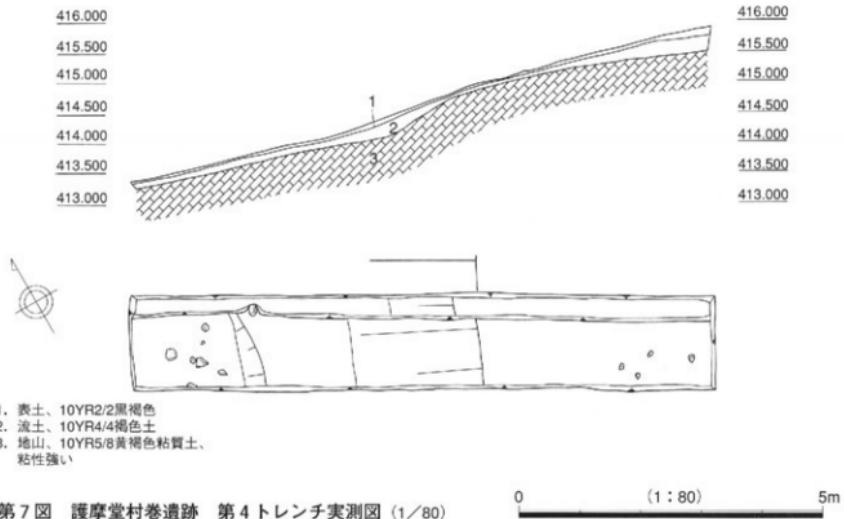


第4図 護摩堂村卷遺跡 第1・2トレンチ実測図 (1/80)

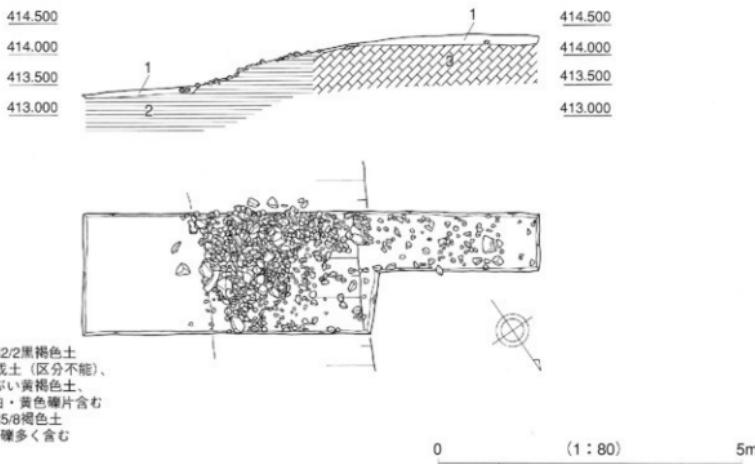
第5図 護摩堂村卷遺跡 第1トレンチ集石実測図 (1/40)



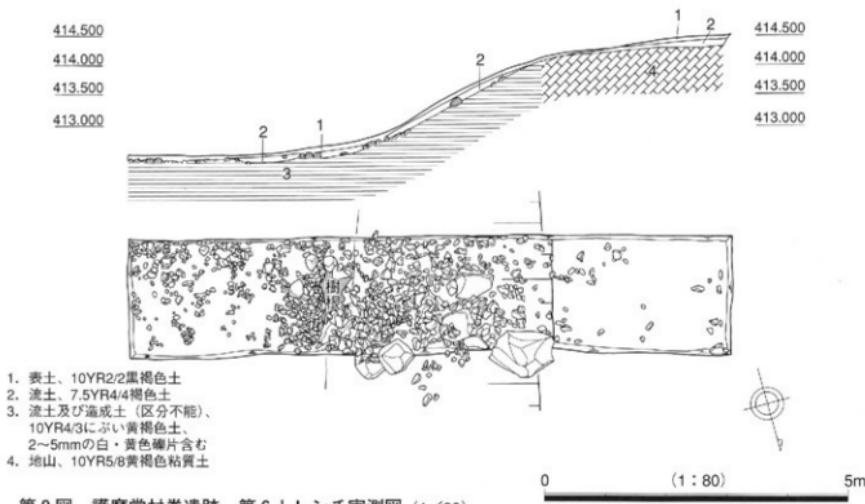
第6図 護摩堂村巻遺跡 第3トレンチ実測図 (1/80)



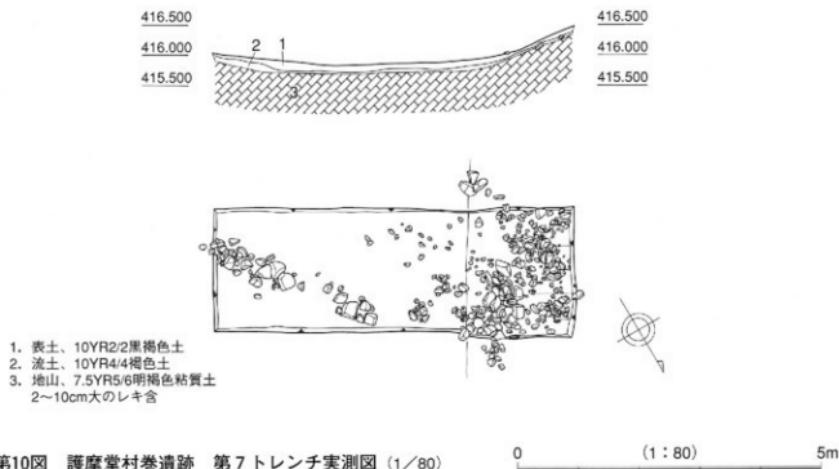
第7図 護摩堂村巻遺跡 第4トレンチ実測図 (1/80)



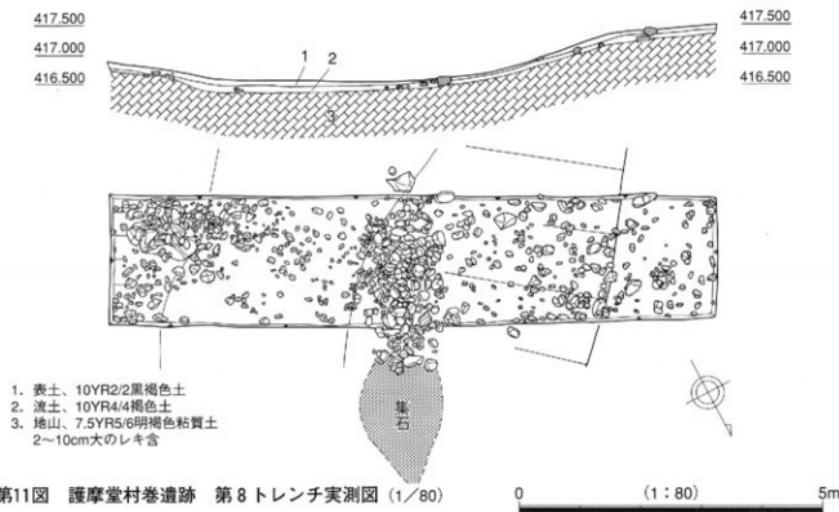
第8図 護摩堂村巻遺跡 第5トレンチ実測図 (1/80)



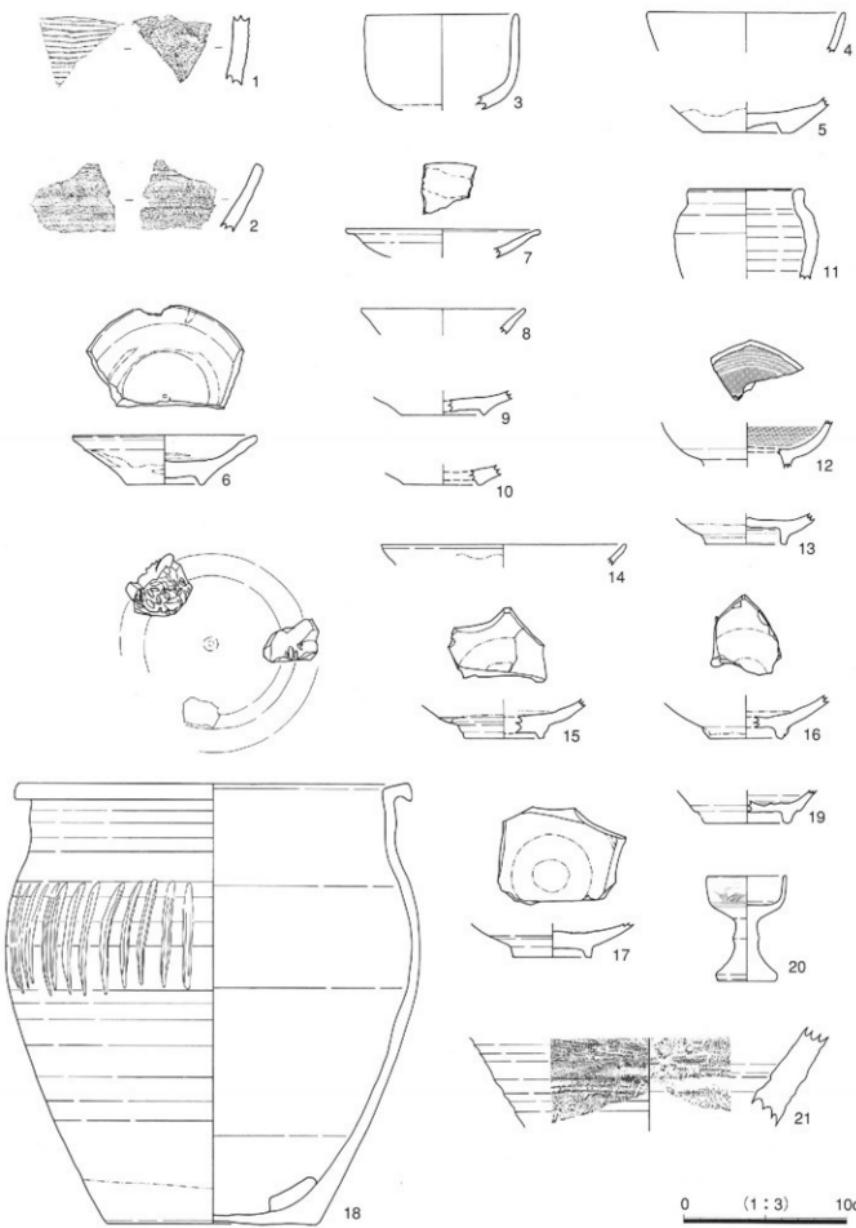
第9図 護摩堂村巻遺跡 第6トレンチ実測図 (1/80)



第10図 護摩堂村卷遺跡 第7トレンチ実測図 (1/80)

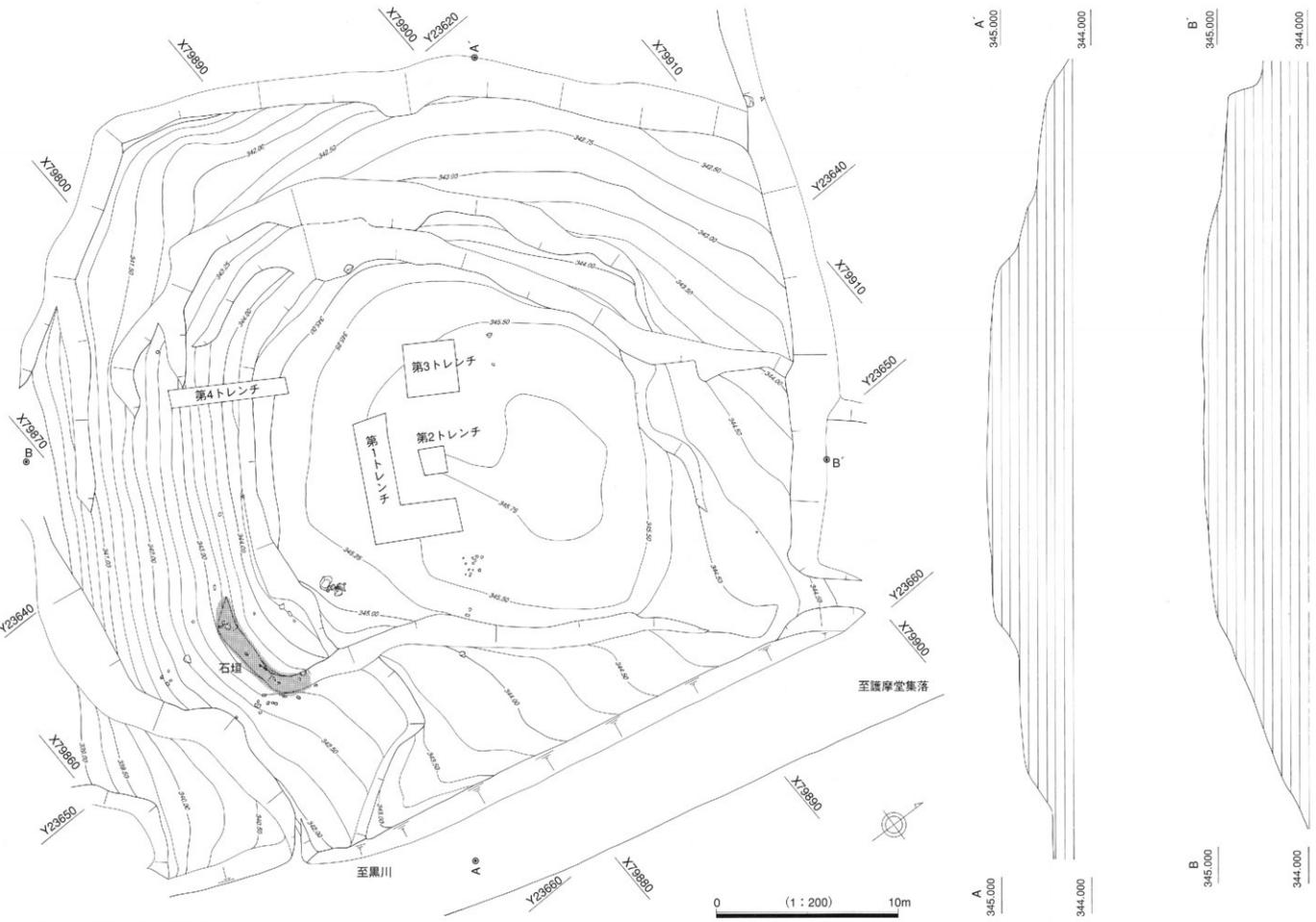


第11図 護摩堂村卷遺跡 第8トレンチ実測図 (1/80)

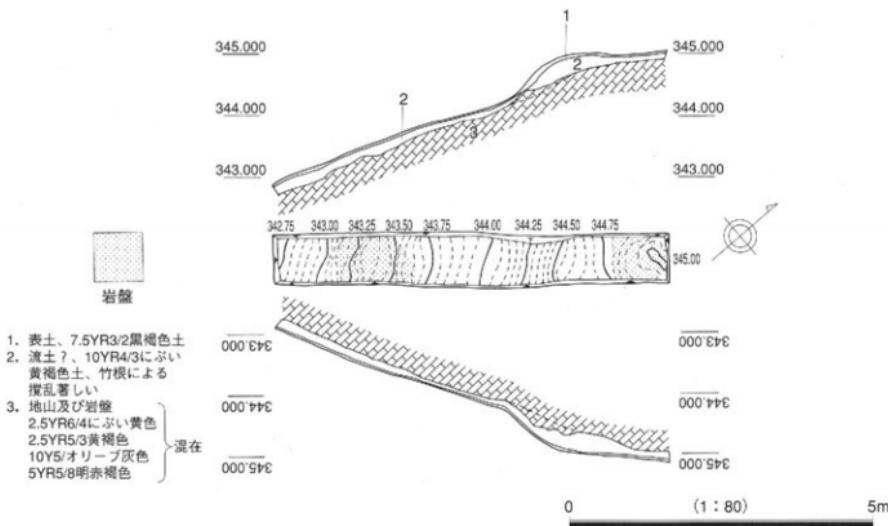
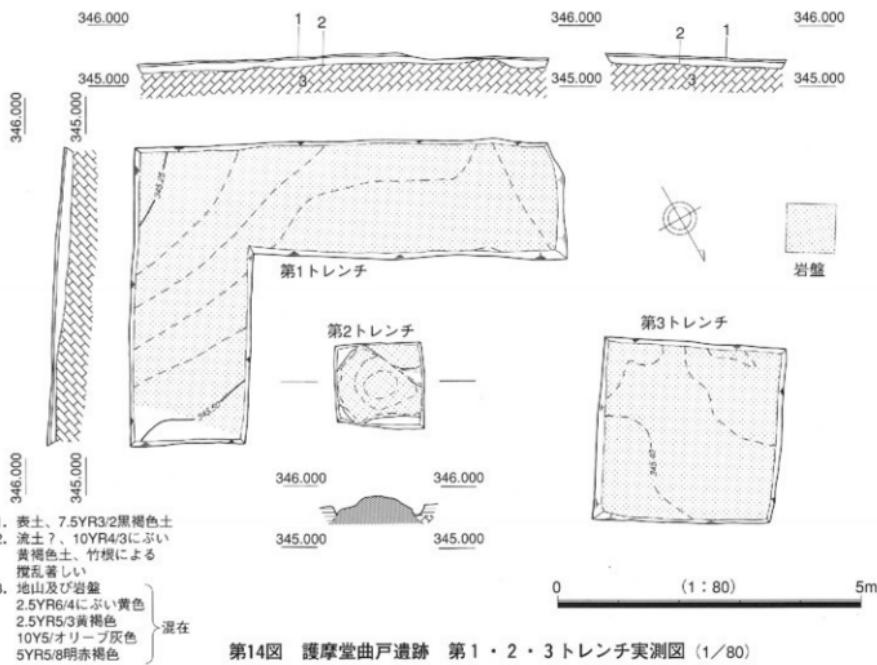


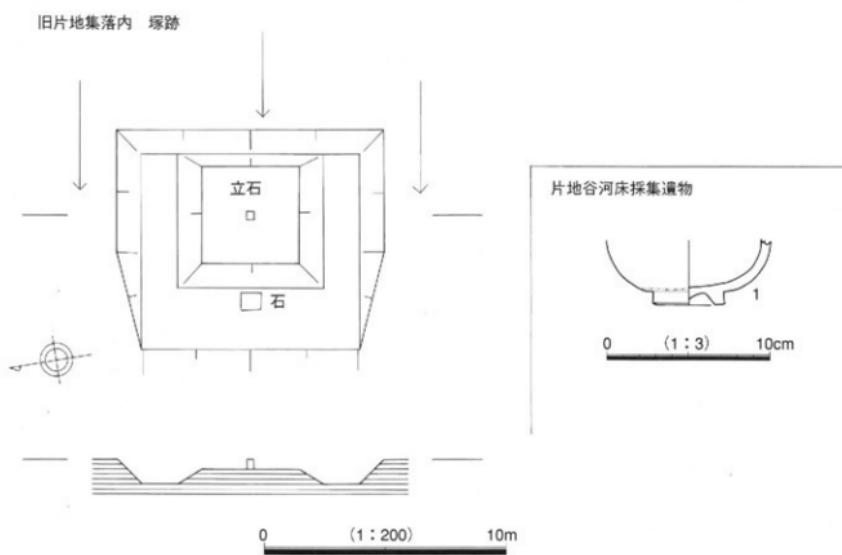
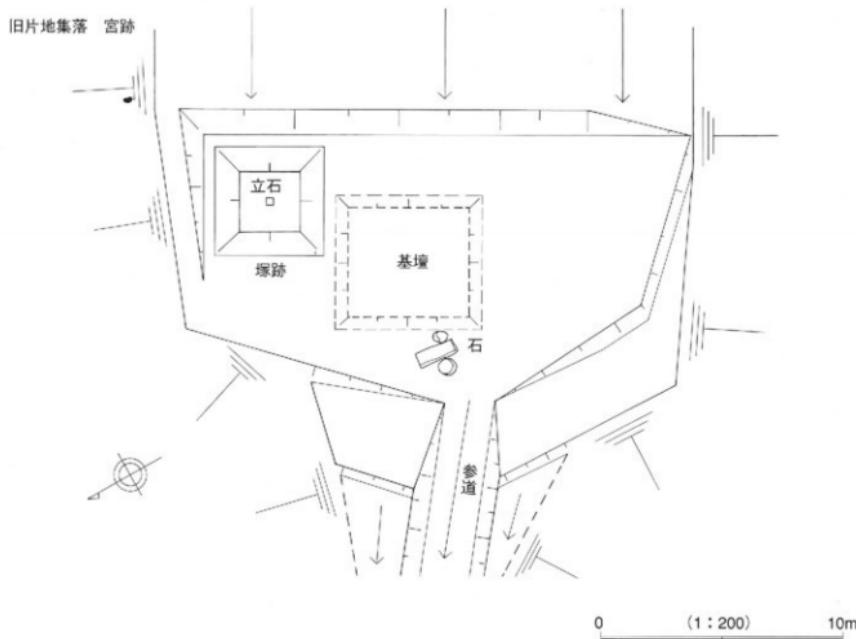
第12図 護摩堂村卷遺跡出土遺物実測図 (1/3)

第1トレンチ: 8・13・16, 第2トレンチ: 4・6・9・10・14・18・19, 第3トレンチ: 7, 平1-1: 2・3・12, 平2-6: 1, 平3-1: 15, 平3-3: 21, 平3-6: 5・17, 平7-3: 20, 通路跡: 11

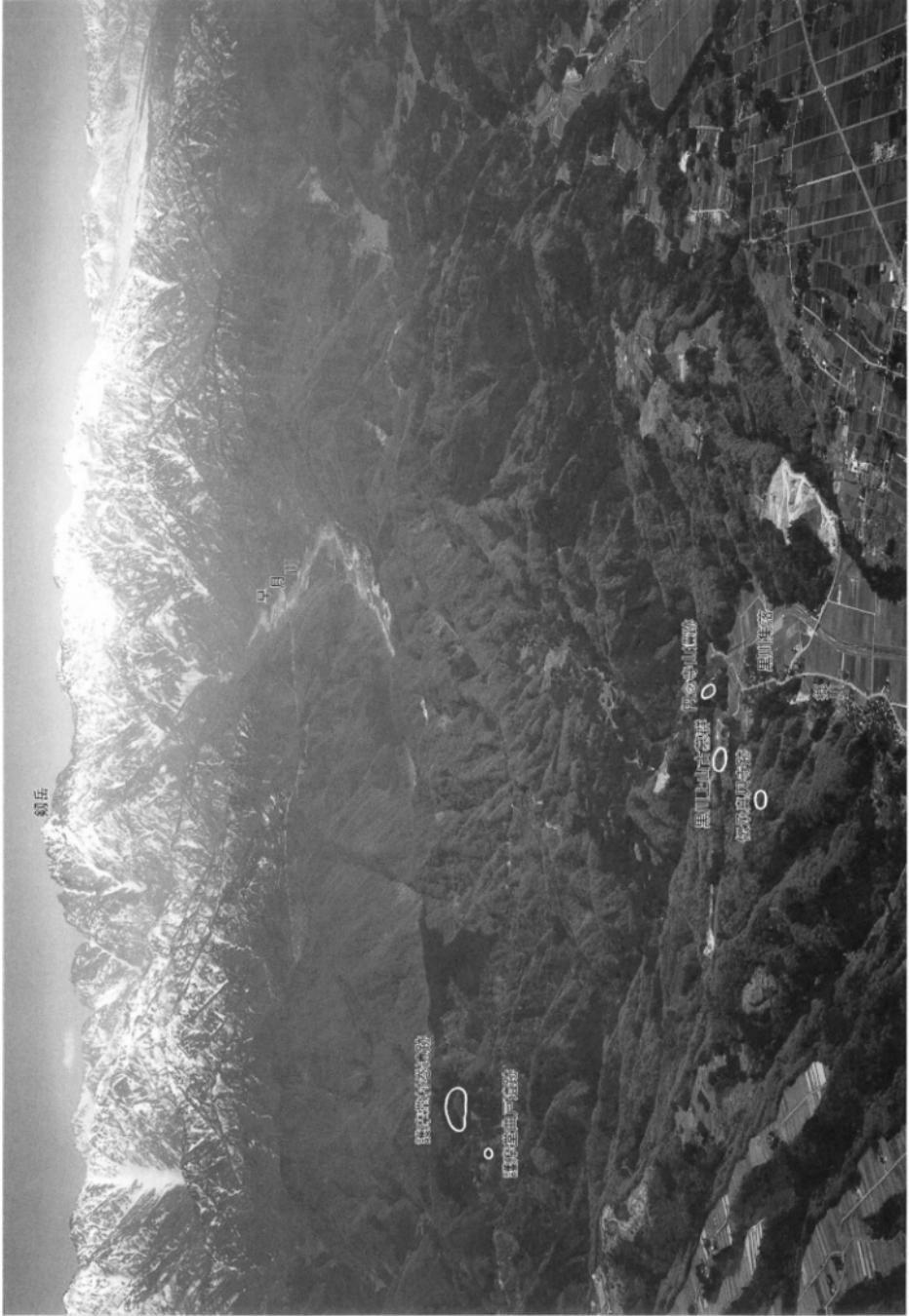


第13図 護摩堂曲戸遺跡遺構全体図 (1/200)





第16図 分布調査遺構概略図、採集遺物実測図



図版1 黒川・護摩堂地区周辺航空写真（東より）



図版2 遺構写真（諏摩堂村巻遺跡）

1. 平坦面1-1全景(南より)
2. 第1トレンチ石壁状集石(南西より)
3. 同前(西より)
4. 同前(西より)
5. 同前(北より)



図版3 遺構写真（護摩堂村巻遺跡）

1. 第1トレンチ集石(西より)
2. 同前検出状況(北より)
3. 同前断面(南より)
4. 第2トレンチ全景(南より)
5. 第2トレンチ集石(南より)
6. 第2トレンチ土層(東より)



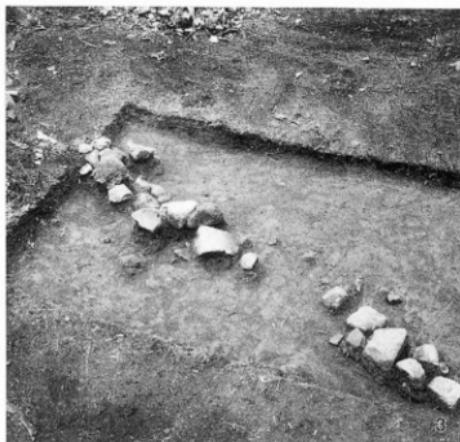
図版4 遺構写真（護摩堂村巻遺跡）

1. 第3トレンチ(南より)
2. 同前(南東より)
3. 平坦面1-2(南西より)
4. 平坦面1-3集石(西より)
5. 第4トレンチ(西より)
6. 同前(南西より)



図版 5 遺構写真（護摩堂村巻遺跡）

1. 土壘(東より) 2. 第5トレンチ(南東より) 3. 同前(北より)
4. 平坦面1-5(東より) 5. 第6トレンチ(東より)



図版 6 遺構写真（護摩堂村巻遺跡）

1. 通路跡沿いの石列(南より)
2. 第7トレンチ(南東より)
3. 同前(北より)
4. 第8トレンチ(南東より)
5. 同前(北より)



1

2



3

4



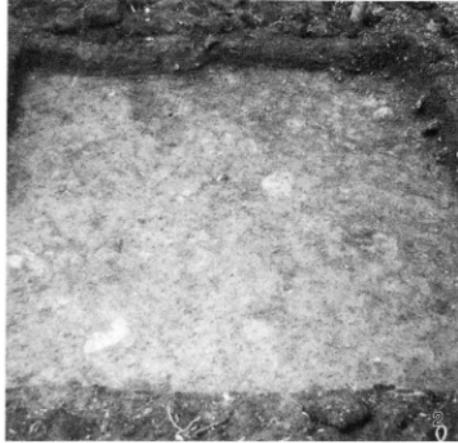
5

6



図版7 遺構写真 (1・2: 護摩堂村巻遺跡, 3-6: 護摩堂村巻遺跡)

1. 調査風景 2. 同前 3. 調査地全景(東より)
4. 上部平坦面(南東より) 5. 第1トレンチ(北東より) 6. 同前(北西より)



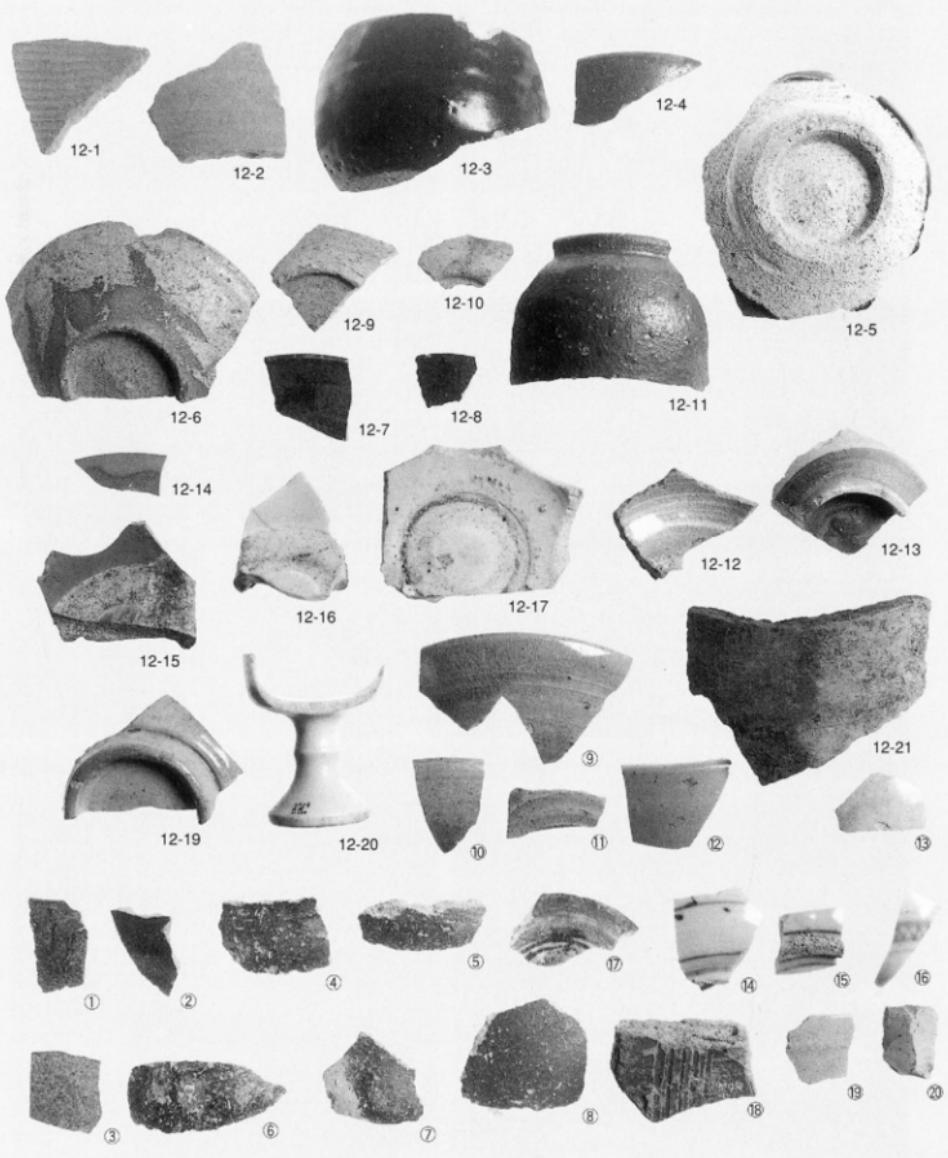
図版 8 遺構写真（護摩堂曲戸遺跡）

1. 第2トレンチ(南東より)
2. 第3トレンチ(南東より)
3. 第4トレンチ(南西より)
4. 同前土層(西より)
5. 石垣調査前(南より)
6. 同前検出状況(南より)



図版9 遺構写真 (1・2: 護摩堂曲戸遺跡、3-6: 分布調査)

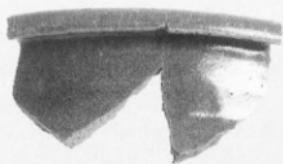
1. 調査風景 2. 同前 3. 同前 4. 同前
5. 3・4へ至る道路 6. 昨年度調査時発見の岩屋跡(平坦面18)



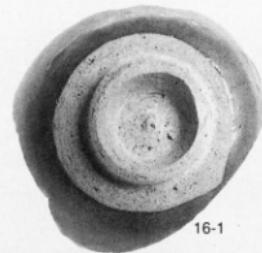
図版10 遺構写真 (縮尺 1/2)
護摩堂村巻遺跡出土、第12図参照



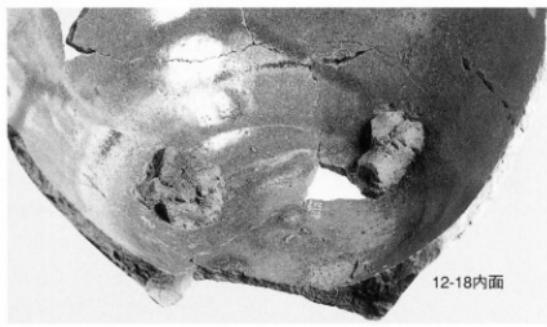
12-18



12-18



16-1



12-18 内面



12-18

図版11 造構写真（縮尺 1/2）

護摩堂村巻遺跡出土、分布調査採集、第12図・第16図参照

引用・参考文献

- ア 宇野隆夫・西井龍儀他 1993 「第二章 医王の山と里の遺跡を探る」『医王山文化調査報告書 医王は語る』
福光町・医王山文化調査委員会
- 越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会 1988 「越中瀬戸焼発祥四百年記念誌」
- 大橋康二 1993 「肥前陶磁」考古学ライブラリー55、ニュー・サイエンス社
- カ 上市町 1970 『上市町誌』
- 上市町教育委員会 1995 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』
- 上市町教育委員会 1997 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第2次調査概報』
- 上市町教育委員会 1998 『富山県上市町黒川上山古墓群第発掘調査3次調査概報』
- 上市町教育委員会 1999 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第4次調査概報』
- 上市町教育委員会 2000 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第5次調査概報』
- 上市町教育委員会 2001 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第6次調査概報』
- 上市町教育委員会 2002 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第7次調査概報』
- サ (財)富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所 1996 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編)―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ―』
- タ 立山町教育委員会 2001 『新瀬戸古窯-県営土地改良総合整備事業金剛寺地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査-』
富山県 1984 『富山県史 通史編Ⅱ 中世』
- ハ 北陸中世土器研究会 1994 『中世北陸の寺院と墓地』 第7回北陸中世土器研究会資料
- マ 宮田進一 1988 「越中瀬戸の窯資料(1)」「大境」12号 富山考古学会
- ヤ 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

報告書抄録

ふりがな	とやまけんかみいちまちくろかわうえやまこほぐんはつくつちょうさ だい8じちょうさがいほう ごまとうわらまきいせき ごまとうがゆいせき						
書名	富山県上市町 黒川上山古墓群発掘調査 第8次調査概報 護摩堂村巻遺跡 護摩堂曲戸遺跡						
編著者名	上市町教育委員会						
編集機関	上市町教育委員会						
所在地	〒930-0393 富山県中新川郡上市町法音寺1番地						
発行年月日	平成15年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
護摩堂村巻遺跡	中新川郡 上市町護摩堂	016322	36度43分00秒	137度26分03秒	20020704 ~	12,000m ²	遺跡整備のための資料収集
護摩堂曲戸遺跡			36度43分10秒	137度25分52秒	20030331	2,000m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
護摩堂村巻遺跡	寺院・僧坊跡か	中世・近世	平坦面・土壘・通路跡・石列、集石	珠洲・越中瀬戸・唐津・伊万里等	寺院、あるいは僧坊跡と考えられる広大な平坦面群。集石を伴う造成工事の痕跡、砂利敷きの通路跡などを検出した。		
護摩堂曲戸遺跡	塚跡か	不明	塚状地形	なし	段築を伴う塚状の地形。地山・岩盤の削り出しの後に盛土によって成形したことが窺われた。		

富山県上市町
黒川上山古墓群発掘調査
第8次調査概報
護摩堂村巻遺跡 護摩堂曲戸遺跡

発行日 平成15年3月
編集・発行 上市町教育委員会
印刷者 株式会社チューエツ